

『就実論叢』第42号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2013年2月28日 発行

リフォームの縫製指導

Sewing Guidance of Re-formation

菊 永 典 子

リフォームの縫製指導

Sewing Guidance of Re-formation

菊 永 典 子

1. はじめに

今の時代、既製品があふれていて、買えばいくらでも手に入り、「使い捨て」が当たり前のようになってきているが、学生には、衣服を大事にしてもらいたいと願っている。流行が終わった時や体型が変化した時には、丈を短くしたり、幅を変えたりとリフォームを楽しんでほしい。また、既製品に少し手を加えて、より自分らしいオリジナルなものにアレンジしてみる衣生活の楽しみ方もある。さらに、着られなくなってしまった衣服をもう一度使える何かおしゃれなものに変身させて、その布を大事によみがえらせる喜びも味わってほしいと願っている。

そのために、以前から、学生にはリフォーム技術を身につけてほしいと願っているが、授業時間内では課題製作に時間を費やし、なかなかそれに取り組む時間的余裕がない。さらに、現状として、若い学生や20、30代は流行・ファッション重視、個性や感性の確立の時期であり、リフォームなどにはほとんど興味を示さず、リフォームとは無縁の時期である。が、しかし今から腕を磨いておかないと、特に体型の変化によるその必要性を感じる40、50代、高齢期になってからでは遅いと思われる。

そこで、リフォームの技術指導を実践するための資料を得ることを目的として、まずリフォームの現状についてのアンケート調査を行った。これは以前にも同様の調査^{1)、2)}をしたので、追加調査としてその比較をした。さらに、今回はこの調査に合わせて、リフォームのお誘いをし、リフォーム実践を試みたので、その報告をする。

2. リフォームに対する学生の意識調査

前回同様、学生が衣服のリフォームについてどのように考えているのか調査した結果について報告する。

2-1 調査方法

調査対象：就実生活実践科学科1年75名

調査内容：1. リフォームに関する質問紙によるアンケート調査

2. 今までの調査結果（2007年、2009年）との比較

2-2 結果及び考察

現在の学生は、小・中・高と縫う経験がどんどん少なくなっている状態で、縫うことが好きかどうかの質問であるが、好きと答えた学生は47%であった。前回の調査では、51%であ

り、前々回の調査では、54%で、ほぼ半数の学生が好きと答えているが、徐々に減少しているようである。上手に縫えることを望んでいるかどうかは、97%の学生が望んでおり、前回96%、前々回95%であり、より望んでおり、ほとんどの学生が縫えるようになりたいと望んでいる。まれに望まないと割り切っている学生もいる。最近、家で針仕事をしたことがあるかどうかについては、ある学生が、38%、前回40%、前々回38%とほとんど変わらなかった。あると答えた学生が何をしたかは以下の通りである。

- ・バッグのほつれ直し
- ・マスコット作り
- ・ボタンつけ
- ・おまもり作り
- ・シュシュ作り
- ・愛犬の服
- ・やぶれの補修
- ・ミラーのカバー
- ・ぞうきん作り
- ・服の製作
- ・バッグに刺繍
- ・ぬいぐるみ作り

などであり、ボタンつけぐらいは縫うことが嫌いな学生でも行っていた。

ところが、簡単なボタンつけや服のほころび直しはどうしているかの質問では、前回、前々回と比較すると、

今回	自分でする49%	母親にしてもらう50%	祖母にしてもらう35%であり、
前回	53%	47%	11%
前々回	51%	49%	9%

自分でする割合がやや減少しているようであり、縫うことが好きかどうかで決まり、苦手な学生、全体の半分ほどは母親や祖母に依頼しているのが現状であった。母親と祖母に頼る割合は累計85%にも達していた。

次に既製品を買って、全く着られなかったという失敗があったかどうかには、あったと答えた学生が39%であった。前回の57%よりはずいぶん減っていた。上手な買い方をしているか、ユニバーサルデザインの効果でもあるだろう。失敗したものはどのようなものでどうしたかと尋ねると、以下の通りであった。

- ・大腿囲が合わないズボンで妹にゆずった。
- ・体の成長によって合わなくなった。
- ・自分に合わなかったから、そのまま放置している。(6)
- ・着てみたら自分らしくなかったので、知り合いに譲る。
- ・思ったよりセーターのサイズが大きかったので、姉に譲った。
- ・サイズが合わなかった。(3)
- ・スカートがずれる。
- ・似合わない、サイズが合わない。
- ・丈が長すぎたり、短すぎたり。
- ・返品した。譲ったり、売ったりした。(3)
- ・着心地が悪かった。

次に既製品を買って、この部分がこうだったらいいのにと手直しを希望した学生は74%で

あり、前回でも71%と、以前とほとんど変わらず、既製品そのままでは不便だったり、着心地が悪かったり、デザイン的にも不満があったりと、個々の創造性、独創性を加えたい欲望があることは確かである。

また、流行が終わった時とか、体型が変わった時とかで、自分でリフォームできたらと思ったことがあるかどうかを尋ねてみると、あると答えた学生は59%、前回44%、前々回57%であり、約60%の学生は技術習得を望んでいる。

ところが、今までにリフォームをしたことがあるかどうかの質問にはわずか15%であった。これは前回21%、前々回21%と比較して、減少傾向にある。

リフォーム例を尋ねてみると、以下の通りであった。

- ・ワンピースをスカートにした。
- ・服を短く切った。
- ・ズボンをスカートにした。
- ・ギャザー量を変えた。
- ・パッチワークのティッシュカバーを作った。
- ・Tシャツの袖を短くした。
- ・Tシャツの丈を短くした。

縫うことの好きな一部の学生はそれぞれに個性的な工夫をしてリフォームを楽しんでいるようであるが、その割合は非常に少ない。ほとんどの学生がリフォームを望んではいるが、その技術がなく、実行するまでには至っていない。その技術指導の必要性を強く感じている。多くの学生にリフォームに興味を持ってもらい、その楽しみを味わってもらうためには、それらの作品を一度目にすることが必要ではないかと思われる。身近な友達が作ったと聞き、驚いている光景を目にすることがあるが、その刺激が一番効果的と思われる。

次に実践に向けて、助けを借りてなら一緒にリフォームしてみたいと思うかどうかを尋ねた。57%の学生が思うと答えた。ところが、リフォームしたいものがありますかと尋ねるとあると答えた学生は33%であった。それでも前回の10%に比べると、はるかに多かった。

今回のリフォームに関するアンケートは既製品に、少し手を加えて好みのデザイン、デコレーションをして、オリジナルなものに作り替えるなどの楽しみやより着心地良く手直してきけるようになるための技術指導を考える資料を得るための調査であり、またリフォーム実践のお誘いも兼ねていた。しかし、なかなかそのようなお誘いに乗ってくれる学生がいるかどうか期待はできなかった。夏休みを返上してまで縫物をするほど手作業の好きな学生はほとんどいない。参加者ゼロもありうると考えていた。ところが、3人が名乗りをあげてくれた。この3人の学生はとても真面目で毎週授業のようにやってきて実習をした。この有志3人の課外活動は若者の求めているもの、好み、要求などを知るための手がかりとなった。さらに、今後の後輩たちへの参考資料として、貴重なリフォーム実践活動記録となった。

3. リフォーム実践活動

有志3人の活動開始であるが、この3人の縫製経験の有無については、一人は高校時代に経験しており得意な学生、もう一人は経験してはいるがあまり得意でない学生、もう一人は無経験の学生という構成である。なかなかいい組み合わせであり、お互いに助け合っの製作活動である。3人とも作りたい意欲は十二分にある。

3人がリフォームしようと持ち寄ったものは以下のものであった。

- ・スカートの裾レースの補修
- ・ジーパン生地とTシャツとでのポーチ作り
- ・ブックカバー作り

これらの製作に入る前に、まずは、ミシンの扱いや手縫いの手慣らしとして、ある小物を作ってみてもらうことにした。小物は“出し入れ便利なペンケース”である。これは今年刊行された『楽しくスクールソーイング（基礎から応用までの作品集）』³⁾の中の1点である。

実は、この書籍は、近年、大学や短大の被服製作実習の中で、学生の技術力の低下が著しいと被服構成学部会員の先生方も教材の選定や指導法に苦慮しているということから刊行されたものである。被服構成学部会は大学、短大の教員を主たる構成員としていて、専門家の立場から中学や高等学校の現場の先生方や生徒さんに直接働きかけて、被服製作や布を使ったものづくりの楽しさを作品例によって伝えたいと考えて、この書籍を刊行した。

この作品にはファスナーつけもあり、リフォームに入る前のちょうどよい練習材料にもなると考えた。また、短大生から見てのこの小物の製作の難易度の参考意見を聴くことができた。作り方は以下の通りである。

3-1 出し入れ便利なペンケース

① 材料の用意

キルティング布22cm×22cm

20cmファスナー 1本

タブ用綿テープ5cm×2本

布の周囲にロックミシンをかけておく。

② ファスナーの片側を縫う。

ファスナー付け部分の縫い代を

1cm折り、折り山から0.1cm～0.2cm

のところを上側からミシンで縫う。

途中で針を布に刺したままファスナーを閉じて残りを縫う。



- ③ ファスナーのもう片方を縫う。まず、ファスナーを開けて、上側から縫い、下方約4cm縫い残す。次にファスナーを閉めて下側から残りの4cmを布が輪になった状態で縫い終える。



- ④ 裏に返してファスナーを付けた両端を突き合わせて折り、中央にタブを挟んで、左右の端を縫う。(ファスナーは少し開けておく)



- ⑤ 四すみをつまんでまちを縫う。両端の縫い代は下に向ける。



- ⑥ 表に返して出来上がり。



作り方のチェックポイントは以下の通りである。

- ミシンをうまくかけることができた
- 細い筒状のものにファスナーを付ける方法が理解できた
- タブの付け方がりかひできた
- まちの縫い方がり理解できた

ファスナーをミシンで縫いつけるのはなかなか難しいもので、短大生であっても未経験だと、ミシンを直線にかけるのも難しく、しかも端ミシンとなると、「これが中学生向け？」という反応であった。慣れている学生であっても、③の輪状になったすきまで最後の4cm程を縫うところはやりにくかったと言っていた。手縫いなら難しくはないけれどという感想であった。

タブの付け方は④のように逆さに挟んでいれておくと、ひっくり返すとうまく挟まれているという付け方に、初めてだと気付かない部分であろう。

まちの縫い方はどのようにつまめばこういう立体になるという構造を理解して、一度はやってみてほしい部分である。

コツがわかれば、簡単と思える作品ではあるが、短大生にも十分練習になる作品例と思われた。

3-2 スカートの裾レースの補修

このスカートはお母さんのもので裾のレース部分が傷んで所々切れた状態であった。レース部分を直すのは不可能と思われ、幸い、レース部分の丈が長かったため、その部分を二つ折りにしてまつることにしてはどうかと検討した。少しスカート丈が4cmほど短くなるが、ロングスカートなので構わないということだったし、バランス的にも不自然ではなく、ほつれなどがすっきりと収まりそうだったので、その方向でリフォームに取り掛かることに決定した。学生はとても上手に補修をして、見事に新品のように仕上げた。

お母さんも喜んでくれたそうであった。



3-3 ジーパン生地とTシャツ利用のポーチ作り

- ① 着られなくなったジーパンからポーチの大きさに生地を切り取り、ロックミシンでほつれ止めをする。

- ② 飾りのフリル布としてTシャツの白い部分を切り取り、ギャザーを寄せておく。
フリル2本の準備をする。
- ③ 本体布にフリルを縫いつける。次に練習どおりファスナーを縫いつける。
- ④ 中表にして袋状になるように両端を縫う。
- ⑤ 最後リボン飾りをつけて完成。

本人のお気に入りにはフリルたっぷり、リボンには特にこだわりがあると言う。ジーパン生地とTシャツのフリルを合わせると言うアイデアがすばらしく、とてもかわいい作品となった。



3-4 端切れ利用のブックカバー作り

一般には、本の大きさに合わせて、カバーできるだけのたて・よこの長さを決めて、縫い代1cmを加えた長方形布を2枚用意すればいいのだが、今回は『袋物のはなし』⁴⁾を参考にずいぶん凝ったものに挑戦した。水玉模様の布とスエードタッチの布を利用して、さらにファスナー飾りのついたものを計画した。本のサイズとどの位置に切り替えが来るようにと、なかなか縫い始める前の裁断に苦労していた。

- ① 表側の布となる方にファスナーをつける。
- ② ①の表側の布と裏側になる布と中表にして周囲を縫う。
- ③ ファスナー明きから表に返して、本の表紙を差し込めるように、両端を内側に折り返し、上下部分をしっかりと縫いとめる。



本人の一番のお気に入りはファスナー飾りであって、2種の布の組み合わせもよく、とてもしゃれたブックカバーが出来上がった。それを見た妹さんが欲しがって、もうひとつ作るそうであった。

3-5 手さげ袋

お母さんから手さげ袋を作ってほしいと頼まれたということで、追加で作ったものである。たまたまサンプル袋（直線のみでミシン縫いでできるポケットとまちのある簡単な袋）があり、裁断済みの布もあったので、それを見ながら2時間ほどで作ることができた。ポーチを作った学生だったので、ちょうどよい復習材料となったと思われる。



袋の上側の両サイドにスナップを付けて形に変化をつけることもできる。
お母さんに愛用してもらいたいと願う。

4. おわりに

アンケートより、ほとんどの学生が上手に縫えるようになりたいと希望している。既製品に満足できず、手直しを希望する学生が約74%もいる。また、助けを借りてなら一緒にリフォームしてみたいという学生が約60%もいる。

この学生たちに、どんなリフォームなら、する気になってくれるだろうか。学生の興味関心を引く小物作品はどのようなものだろうか。できるだけ簡単な作りで、楽しみながら縫製技術を磨けるようなものはどのようなものか。以前からこのようなことを考え悩んでいたのだが、今回のリフォーム実践活動は、そのヒントとなる貴重な教材研究となった。1, 2時間でさっとでき、苦にならずに楽しめる小物製作として前回タオル帽子⁵⁾をとりあげたが、引き続き、ペンケース、ポーチ、ブックカバーなども候補作品となりうると感じた。

参加して頑張ってくれた学生たちは布を大切に思う気持ちがとても強く、すぐ捨てられてしまいそうな布が再度生まれ変わってゆくりフォームを楽しんでくれたようである。

「みんなもやりに来たらいいのに。」とのつぶやきが聞こえてきた時は、筆者にとって、とてもうれしく、これからの励みとなった。このような学生がいたことは非常に喜ばしいことであった。この実践例をもとに、もっと多くの学生に手作りのぬくもり、楽しさを味わってもらいたいと願っている。そのためにも今後もこのようなリフォーム実践活動を続けていきたいと考えている。

最後に、参加して頑張ってくれた3人の学生に心から感謝の意を表したい。

5. 参考文献

- 1) 菊永典子：針仕事や高齢者衣服に関する短大生の意識、就実論叢、第36号（2007）
- 2) 菊永典子：衣服のリフォーム、就実論叢、第38号（2009）
- 3) 日本家政学会被服構成学部会：『楽しくスクールソーイング』（2012）
- 4) 森南海子：『袋物のはなし』（1997）
- 5) 菊永典子：タオル帽子、就実論叢、第41号（2012）